

# クローズアップ NGO・NPO

共住懇  
代表 山本 重幸

## “多文化コミュニティ” 新宿・大久保の20年の歩み

### ■ あつれき それは衝突と軋轢から始まった

共住懇は、東京都新宿区大久保地域を拠点に活動しているボランティアに基づく市民のグループで、1992年4月につくられました。1991年11月に新宿区によって開かれたセミナーの参加者が自分たちで継続的な地域活動を始めました。90年代初頭、地域の外国人の増加に伴い、ゴミや騒音などの住宅環境や外国人による犯罪が社会問題化しました。このころは短期滞在者が多く、外国人は顔の見えない存在でした。私たちの活動は、急激な地域の変化による「衝突と軋轢」の中から生まれた活動ともいえます。



韓国からの商品やサービスを求める観光客でにぎわう大久保通り

### ■ 外国人とともに住むまち

新宿区は2012年1月現在で、人口318,086人のうち33,568人の外国人登録があります。そ

して年間で約1万人が転入・転出するという流動性の高い特徴がありながら、近年では80～90年代に来日したと思われる40代後半～50代前半の人口に定住傾向がみられます。そのうち大久保地域周辺には1万人ほどの外国籍住民が住み、区全体に対する割合では3割程度になります。大久保ではニューカマー外国人による生活圏が形作られて20年くらいになりました。外国人の経営による各種の事業は拡大し、日本人事業者や地域経済とも密接な関係を持っています。家族滞在が増えるなど地域への定住傾向もみられるようになりました。いま、福祉・教育・防災などを含むコミュニティの課題として「外国人とともに住むまちづくり」に多面的に取り組むことが必要だと考えます。

### ■ 「外国人」とは？

大久保の特徴として「外国人」のイメージは一つではありません。民族や出身地域、文化や属性もさまざまな人々が、同じまちで暮らしています。来日時期も異なり同国人同士でも構成員が多様で、ビジネスとなれば競争は激しいです。日常に対する不安は誰にとっても問題であり、互いのコミュニケーションを図ることが重要です。

### ■ 「共住懇」という活動

このような地域の背景から共住懇は発足以来、新宿というコミュニティをどうしたいのか、と考

えてきました。主な活動は、大久保・百人町を中心とした地域調査、外国人への相談会開催・情報提供・交流の機会の提供、それらに関する学習会や報告書の作成を行っています。日常の中で日本人も含め多民族が混ざり合う地域では、文化の交流や外国人支援活動だけではなく、地域社会の将来を考える必要があります。共生のためのビジョン（地域的な合意）が必要ですが、情報の偏りなどもあり問題が正しく認識されず、外国人が地域の一員であると認められることが難しい、などの問題もあります。また、問題が大久保（特定の地域）に集中しているため、社会全体での問題・課題の共有が難しい状況にあります。



歩道に立ち止まることを禁止する大久保通りの看板

## 神戸の人々にまなび、災害に備える

もう一つの活動の柱として「地域防災・減災のまちを推進」を掲げています。1995年、「阪神・淡路大震災」の支援または調査のため神戸市長田区に向かった共住懇メンバーが、「地域防災と災害時の外国人支援」という課題を持ち帰りまし

た。大きな被害にあった長田区は、大久保と同じような外国人の集住地域でもあったのです。神戸の人々にまなび、日常の地域コミュニティを見直し、災害時などに互いに助け合える関係をつくることを目的として、地域や行政にも働き掛けをしています。

## 地域の“観光地化”という新たな課題

新宿区では最近、中国・韓国などから来日する人が増加しています。大久保では、韓国人と並んでネパール人やアジア系イスラム教徒の進出が目立っています。また、区内のミャンマー人人口（1,153人）のうち全体の約6割が“難民”とみられる、という調査報告もあります。現在、大久保地域は新来韓国人によって観光地化され来街者でにぎわっていますが、新たな問題も生じています。急激な観光地化に伴い、まちの構造の許容量を超えてしまったのです。地域が住宅地域から商業地域へと大きく変化していることに、住民は戸惑いを隠せません。



イスラム教徒のための食品店。近くにモスクもある

大久保で暮らす人々は、暮らし方や考え方もさまざまです。このようなコミュニティでは、それぞれ違う文化や生活背景を持った人たちが、互いに支え合い、より良い生活をするためのしくみが必要です。今後も地域の特徴を活かしたコミュニティの可能性を探り続けたいと思います。